

# 1860年代のハワイ王国における英国国教会

## ―ステイリー主教にたいするアメリカ人のまなざし

目 黒 志帆美

### 要 旨

1860年代、第四代ハワイ国王カメハメハ四世が英国国教会の聖職者をハワイ王国に招致した狙いは、アメリカ人による影響力を阻止し、王権を強化することにあった。四世のイギリスにたいする聖職者派遣要請に応じてイギリス政府が派遣したステイリー主教は、ハワイにおいてアメリカ人会衆派とは相入れない信仰思想と国王の庇護のもと宣教活動を開始した。このため、ステイリーはハワイ支配を目論む「イギリスの手先」としてアメリカ人から激しい非難を浴びた。しかし、イギリス政府も英国国教会も政治的意図をもってステイリーを派遣したとはいえ、本論ではステイリーはアメリカがつくりあげた「敵」であったと結論づけた。

【キーワード：ハワイ王国 / 英国国教会 / ステイリー / アメリカ人会衆派宣教師 / つくられた「敵」】

### はじめに

1810年に成立したハワイ王国は、アメリカ人宣教師とその子孫による支配体制が巧妙に築かれた末、1889年にアメリカ合衆国に併合された。このため、19世紀ハワイ史研究においては、もっぱらアメリカによるハワイ支配のプロセスに関心が集まる傾向がある<sup>1</sup>。

しかし実際には、ハワイ国王によるイギリスへの接近政策や、宗教面や外交面におけるイギリス人のハワイへの介入はアメリカ人側に焦燥感を抱かせ、アメリカによるハワイ支配体制構築に拍車をかける一大要因となった。それというのも、1820年代以降ハワイにおいて布教活動を展開したアメリカ人宣教師勢力にとって、たびたびハワイ介入を試みてきたイギリスの存在はアメリカによるハワイ支配体制を揺るがしかねない脅威であり続けたからである。また、北米大陸においてはアメリカ独立戦争、1812年戦争、テキサス併合といった歴史的事件をめぐって英米間に根深い確執があった点からしても<sup>2</sup>、1860年代当時において、英米双方に敵対感情があったことは想像に難くない。

以上を踏まえ、本論は1862年に親英派の第四代ハワイ国王、カメハメハ四世（在位1855-63）が招致した英国国教会の聖職者トーマス・ネトルシップ・ステイリー（Thomas Nettleship Staley）に着目する。このステイリーという人物をめぐっては、アメリカ人会衆派宣教師をはじめとする多くのアメリカ人によって、ハワイ支配を狙った「イギリスの手先」という評価が下されてきた。後にみるように、たとえばアメリカ人がハワイで発行していた当時の新聞は、アメリカ人勢力を打ち砕くためイギリスが「政治的意図」をもってステイリーを派遣したと主張した<sup>3</sup>。また、アメリカ人作家マーク・トウェインは、古代ハワイの野蛮な風習の復活は「軟弱で取るに足らない男（ステイ

リー)に高い地位と権限を与えてしまったことから生じた」とし、ステイリーを「じつに低劣な素質の持ち主」と罵倒している<sup>4</sup>。以上にみるアメリカ人によるステイリーにたいする警戒心と激しい敵意はどこから生じたのだろうか。

ここで、ハワイ王国における英国国教会にかんする研究に触れておきたい。まず、ロバート・ルイス・シームズ (Robert Louis Semes) による研究 (2000) は、イギリスによるステイリーのハワイ派遣にはハワイ支配を目論むイギリスの政治的意図があったことを前提とし、英国国教会対アメリカ人会衆派という対立構造を、英米の聖戦 (Holy War) と捉えた<sup>5</sup>。シームズが提起したこの二項対立的構造を教会論の枠組みからより詳細に分析したのが、山本貴裕の研究 (2013) である<sup>6</sup>。山本は、ステイリーに代表されるハワイの英国国教会とアメリカ人会衆派宣教師を中心とする福音派との間の対立は、儀式や典礼などの形式を重視する「可視的教会」と個人の内面を重視する「不可視的教会」との対立であったことを明らかにした<sup>7</sup>。

以上の先行研究は、これまでのアメリカ人対ハワイアンという構図でのみ捉えられてきたハワイ史にイギリスの存在を組み込むことでハワイ史の新たな側面を提示しているといえよう。しかしながら、アメリカ人が激しい敵対感情をステイリーにぶつけた理由は、信仰上の理由だけではないはずである。それというのも、アメリカ人会衆派の宣教師勢力が宗教・経済・政治的側面においてハワイにおいて盤石な支配体制を築きつつあったなかで、国王の庇護を受けた英国国教会の聖職者がハワイに到来したことは、アメリカ人にとって危機感を募らせる事態であったからである。こうした問題意識から、本論は英国国教会をつうじて王権の強化をはかろうとした国王カメハメハ四世の意図、ステイリーの信仰思想をたどったうえで、アメリカ人会衆派宣教師とアメリカ人作家マーク・トウェインのステイリーにたいする評価を分析することをつうじ、ステイリーとアメリカ人との間で生じた対立の要因に焦点を当ててみたい。

ところで、18世紀から19世紀のイギリス史研究においては、イギリスの「帝国」研究が興隆の一途をたどる一方で、太平洋諸島におけるイギリス人のキリスト教伝道にかんする研究は、伝道先となった諸地域の歴史研究者や文化人類学者の手に委ねられるケースが多い<sup>8</sup>。これらの研究では、ニュージーランド、オーストラリアをはじめとするイギリス領におけるキリスト教諸宗派によるキリスト教化・文明化政策と植民地支配が同時進行的におこなわれた事実が指摘されている。しかし、ここで留意しなければならないのは、こうしたイギリスと太平洋諸島との従属関係が、ハワイ王国とイギリスとの関係とは性質を異にする点である。それというのも、アメリカ人宣教師勢力が盤石な支配体制を構築したハワイの歴史において、個々のイギリス人がハワイ王族との紐帯強化をはかったり、ハワイ王国にたいする軍事的圧力をかけることはあっても、ハワイにおけるアメリカ人勢力の盤石性は揺らぐことなく、むしろアメリカ併合への道が着実に固められていったからである。さらにハワイ史の特色として、着実に進行するアメリカによるハワイ支配を食い止めるべく、歴代のハワイ国王がイギリスに支援を求める場面が幾度となく繰り返されてきたことも留意しておきたい。

以上をふまえ、本研究はまず1860年代のハワイ王国における、国王とイギリスとの関係およびス

テイリーの信仰思想をたどったうえで、英国国教会とアメリカ人宣教師間の「対立構造」のなかで、アメリカ人がステイリーに対して向けた感情がいかんにして醸成されたのかを分析し、その意味を明らかにしてみたい。

## 1. 前史－1860年代までのハワイ王国

ハワイ王国は、1810年、カメハメハ大王が全島を統一して以来1893年に在地アメリカ人によって転覆されるまでの83年間、先住民の国王を戴く独立国家であった。

王国成立以前の1778年にイギリス人探検家キャプテン・クックがハワイを発見して以降、ハワイが太平洋上の交易における重要拠点として世界に認知されると、宗教・政治・経済・軍事等さまざまな側面で欧米列強が絶え間なくハワイに介入した。そのなかで、ハワイ王国において盤石な権勢を確立していったのがアメリカであった。

1820年以降ハワイで布教活動を展開したアメリカ海外伝道委員会（American Board Commissioners for Foreign Missions、略称 ABCFM あるいは American Board、本論では以下「アメリカンボード」と表記する）の宣教師たちは、ハワイアン「文明化」を大義として掲げ、ハワイアンの伝統的文化を否定する一方で、近代的価値観とプロテスタントイズムをハワイに根付かせた<sup>9</sup>。この布教活動が功を奏したのは、支配者階級を中心としたハワイアン側が、崩壊した土着信仰と風習に替わる新たな信仰と価値観を望む状況であったことが、主たる要因として挙げられる<sup>10</sup>。さらに、1830年代以降になると列強による軍事的介入が頻発するようになったことから、ハワイ王国側は近代国家としての体裁を整える必要に迫られた。こうした状況下で、国王カメハメハ三世（在位1825-1854）は、アメリカ人宣教師を中心とした白人の「助言」のもと、憲法や一連の法律を制定することで、独立の維持を試みた。

民主的憲法と近代的土地制度が確立する一方で、王権は縮小の一途をたどった。土地についていえば、元来ハワイアン庶民にとって、ハワイのすべての土地は土着の神の所有物であり、土地を「所有する」という概念は存在しなかった。しかし、土地の私的所有権を認める1840年憲法とそれにもとづく土地関連法が成立するとアメリカ人を中心とした白人によって神の土地は「合法的に」買い占められていった。大規模な土地を所有する砂糖プランターも閣僚も国会議員も、その多くはアメリカ人宣教師とその子孫が占めたことから、19世紀なかばまでに、ハワイ王国の宗教・経済・内政は在地アメリカ人に掌握される状態になったのである。

ところで、ハワイとイギリスの関係史からみれば、アメリカ人の感情を刺激するような出来事がたびたび生じている点は見逃せない。ハワイ王国が成立する16年前、イギリス人探検家ジョージ・バンクーバーはカメハメハ大王（のちのハワイ初代国王カメハメハ一世）と友好を深め、1794年2月25日、両者はハワイをイギリスに「譲渡」する内容の契約を取り交わしている<sup>11</sup>。一方のカメハメハ大王も親英的態度を示し続け、1810年には、カメハメハ一世（在位1810-1819）として初代国王に君臨したのち、イギリス国王ジョージ三世に送った親書のなかで、自分が英国王の「支配下にある」と述べていた<sup>12</sup>。当時、外交に不慣れなハワイ国王が「譲渡」「支配下」といった言葉の意

味をどの程度理解していたか疑問が残るものの、ハワイ側がイギリスとの紐帯を求める姿勢は、すでに建国期に生じていた。

さらに、1820年以降ハワイで影響力を行使しつつあったアメリカ人会衆派宣教師によってハワイ王国の伝統的慣習が否定され、それにともなって王権の權威が削がれつつあった事態を打開しようと、第二代国王カメハメハ二世（在位1819-1824）もまたイギリスに接近を試みた。二世は、時のイギリス国王ジョージ四世と会談するために、妻カママルや側近を率いて1823年11月に渡英した。二世は統治のあり方やハワイに住む外国人との共生方法についてジョージ四世の助言を得たうえで、イギリスにたいしてハワイ支援を要請するつもりだったのである。ところが二世がイギリスに到着するとまもなく、妻のカママルとともににはしかに感染し、二人ともそのまま死去してしまった<sup>13</sup>。このため二世の対英接近策は成果を生み出すことはできなかったものの、建国時から二代の国王が続げざまにイギリスに接近した事実は、アメリカ人宣教師に警戒感を抱かせることとなった。

イギリス人によるハワイへの介入事件「ポーレット事件」もまた、アメリカ人の神経を逆撫でした。この事件は、1843年2月10日、イギリス人軍人ジョージ・ポーレット卿による5ヶ月間におよぶハワイ占領事件であった<sup>14</sup>。ポーレットによる占領から5か月が経過した1843年7月、イギリス提督リチャード・トーマスがハワイを訪れ、カメハメハ三世の復位を宣言した<sup>15</sup>。そのさいトーマスは、イギリス政府はポーレットの行動を容認していないと宣言することで、この事件は決着をみた<sup>16</sup>。

以上のハワイ国王によるイギリスへの接近政策とイギリス人によるハワイ占領事件を目の当たりにした在地アメリカ人は、イギリスがハワイを獲得するかもしれないという危機感を募らせた。こうしたなか、会衆派宣教師を中心としたアメリカ人は、1850年代には自ら起草した民主的憲法「1852年憲法」の制定と土地制度改革を実現させることで、アメリカ人によるハワイ支配の土台形成を着々と進めていったのである。その一方で、王権は縮小の一途をたどり、多くのハワイアンは土地を所有することができず行き場を失っていった。

こうした状況下で即位したのが第四代国王カメハメハ四世（在位1855-1863）と第五代国王カメハメハ五世（在位1863-1872）の兄弟であった。以下では、カメハメハ四世による対イギリス接近策を検討しよう。

## 2. カメハメハ四世と英国国教会

アメリカによる併合を回避しハワイ王国の独立を維持するにあたり、四世がアメリカ人勢力にたいする防御壁として期待を寄せたのが英国国教会<sup>17</sup>であった。四世は、アメリカ人会衆派が宗教・政治・経済を支配する現状を打破するために、英国国教会との結びつきを保ちつつ、君主制国家として安定性を保っていたイギリスをモデルとした国家形成を模索したのであった。さらに、四世は個人的な経験をつうじて、英国国教会への撞着を徐々に強めることとなった。以下では、その個人的経験について、三つの出来事に焦点をあててみたい。

第一に、若年期の四世が、アメリカとイギリスを訪れたときの体験から、アメリカの人種差別的側面とイギリスの君主制の安定性を目の当たりにし、両国の対比によってイギリスの君主制をより

優れたものと意識した経験が挙げられる<sup>18</sup>。

第二に、四世がイギリス人の血統をひく首長階級の女性エマ・ルーク (Emma Rooke) と結婚したことが挙げられる。エマは、カメハメハ一世の側近のイギリス人ジョン・ヤングの孫で、カメハメハ一世の弟ケリイマイカイ (Keliimaikai) のひ孫にあたり、英国国教会のハワイへの導入を強く希望していた<sup>19</sup>。

第三に、1859年9月11日に生じた事件が挙げられる。これは、四世の私設秘書であったアメリカ人男性ヘンリー・A・ネイルソン (Henry A. Neilson) を銃撃した事件である<sup>20</sup>。この行為を後悔した四世は、信仰のよりどころを真に求めはじめた<sup>21</sup>。こうして、四世は若年期におぼえた反アメリカ的感情とエマとの結婚、さらに自らの信仰のよりどころの模索、といった個人的経験の延長線上に英国国教会を求める心境に至ったのである。

以上の個人的体験は、アメリカ人によるハワイ支配の抑制という政治的意図とあいまって、英国国教会のハワイへの招致という構想へと結びついた。1859年、カメハメハ四世は英国国教会の主教 (bishop) のハワイへの派遣をイギリスのヴィクトリア女王に要請した。これにたいしてイギリス側は快諾する姿勢を示し、両国間で協議が開始された<sup>22</sup>。そのさい、カメハメハ四世は、教会建設の資金、聖職者にたいする年間1000ドル相当の資金援助と住居の保障などをイギリス側に提示していた。ただし、こうした支援提供の申し出はあくまでも四世の独断によるものであり、ハワイ政府とは無関係になされたのであった<sup>23</sup>。こうした動きから明らかになるのは、四世がアメリカ人会衆派宣教師とは相いれない英国国教会を国王自らの財力によってハワイに根付かせることにより、アメリカ人の政治的影響力に歯止めをかけようとする四世の熱意である。

四世の聖職者派遣要請は、ヴィクトリア女王からカンタベリ大司教へと伝えられ、英国国教会は、トーマス・ネトルシップ・ステイリーの派遣を決定した<sup>24</sup>。英国国教会は、国王を頂点に、大司教、教区を管轄する複数の主教、牧師、平信徒からなるピラミッド型の階層性を有する。当時、ステイリーは主教より下位の牧師として、また教員として活動していた<sup>25</sup>。通常の海外伝道のケースであれば、海外伝道の知識と経験を有する主教が任命されてしかるべきであったが、カンタベリ大司教がステイリーのハワイ派遣を決定したのは、その教育経験の豊富さからであった。それというのも、カメハメハ四世がイギリス政府に要請した重要事項のひとつが、当時四歳であった四世の息子アルバート (Albert) に洗礼と英国国教会の教義に基づいた教育を施すことであったからである。このため、英国国教会は急いでステイリーの主教昇格を認めるにいたった。一方、四世と妻エマは、ステイリーがハワイに到着し次第アルバートに洗礼を受けさせ、ヴィクトリア女王をアルバートの教母とすることで、ハワイとイギリスとの紐帯を強化しようと計画していたのである<sup>26</sup>。

ところがステイリーが到着する直前に、アルバートは病で夭逝してしまった。四世とエマは絶望の淵にありながらも、1862年10月にハワイに到着したステイリーをはじめとする英国国教会の聖職者らを迎え入れ、ハワイにおける英国国教会の組織「ハワイアン改革カトリック教会 (Hawaiian Reformed Catholic Church)」を創設した<sup>27</sup>。

以上では、カメハメハ四世が英国国教会をハワイに招致するに至ったプロセスをたどった。ここ

からわかるのは、四世が英国国教会の聖職者をハワイに招致する計画に並々ならぬ熱意を示していた一方、イギリス側は四世のもためには応じたものの、聖職者のハワイ派遣にかんしてさほど熱心ではなかったということである。実際、著者はイギリス側のステイリー派遣の意図を探るべく、イギリスにおいて外交資料、および英国国教会の資料を調査したが、ハワイ側の要請に応じてステイリー派遣を決定した事実以上のことを示す資料は存在しなかった。

### 3. ステイリーの宣教思想

在地アメリカ人はイギリス政府が「政治的意図」をもってステイリー主教をハワイに派遣したと主張した。アメリカ人が編集するハワイの新聞『パシフィック・コマーシャル・アドバータイザー』紙は1865年12月30日付の記事において、カメハメハ四世がイギリス側に派遣を要請したのはあくまでも「牧師」(Chaplein)であったのにたいし、イギリス側が「主教」(Bishop)の地位にある聖職者を派遣したことから、イギリス側に明らかな「政治的企図」(political scheming)があったと指摘した<sup>28</sup>。しかし、ステイリーの記述によれば、四世がイギリス政府に派遣を要請したのは当初から「主教」であり、それゆえ英国国教会は牧師の地位にあったステイリーの主教への昇格を急遽承認しなければならなかったという<sup>29</sup>。さらに、ステイリーが、自身のハワイへの派遣はあくまでも「国王カメハメハ四世による招致」(Invitation of the King)によるものであると強調する<sup>30</sup>ことでイギリスの手先というアメリカ人側の誤解を解消しようとしていることからみても、ステイリーがイギリスという国家の政治的戦略のもと、ハワイにやってきたとは考えにくい。

英国国教会は先住民にたいする「温情主義」や「人道主義」にもとづく布教方法を採用していた<sup>31</sup>。ハワイ王国に対してもそれは変わらず、たとえばカメハメハ四世から支援の要請を受けた英国国教会は1861年に聖職者会議を開催し、ハワイに主教を派遣する意図を次のように宣言した。

神が我々に新たな機会をお与えになるのであれば、我々は関心をハワイアンへと向け、ハワイアンの土着の慣習やしきたりに合わせて彼らの心を満たすという方法をとるべきである。こうしたやり方で我々はキリスト教王国を拡大させるという史上かつてない任務を遂行すべきである<sup>32</sup>。(下線部は筆者による)

こうした姿勢は「文明化」の大義のもとでハワイ固有の文化に野蛮性しか認めず、この文化を徹底的に抑圧したアメリカ人会衆派宣教師の姿勢と根本的に異なる。こうした英国国教会の姿勢に共鳴していたステイリーは実際、ハワイにおいて先住民文化保護主義を貫いた。以下のステイリーの言葉は彼のハワイアンにたいする認識を明確に示している。

我々はアメリカ人会衆派が道徳的な問題をまったく解決できていない組織であると思っている。アメリカ人会衆派は、この陽気な人種、太陽のもとで笑って島に暮らす子供たちにはまったくそぐわないのである<sup>33</sup>。

「太陽のもとで笑って暮らす子供たち」というハワイアンを表象からは、一貫してハワイアンを「野蛮人」と表現するアメリカ人会衆派宣教師とは異なり、自然の姿であることを好ましく捉えていることがわかる。さらに、ハワイアンの人口減少にかんする以下の記述もまたステイリーの思想を反映するものである。

1846年には674隻以上の船舶がハワイの港にやってくる。その船舶のほとんどが、太平洋における捕鯨貿易に従事している船舶であった。こうしてネイティブとの接触をつうじて我々白人 (our race) のなかの邪悪な人々が売春と病原菌をもたらしたことはまことにむごいことと言わざるを得ない。その結果、ハワイの人々の人口は急激に減少している。しかしながら、外国人のハワイ居住者は増加しているのである<sup>34</sup>。(下線部は筆者による)

この記述にみられる「我々白人のなかの邪悪な人々が売春と病原菌をもたらした」という認識はアメリカ人会衆派宣教師の認識とはまったく異なる。アメリカ人宣教師は、捕鯨船員を自分たちと同じ「白人」とはみなしておらず、ハワイアンの人口減少の問題にもさほど関心を寄せていなかった。しかし、ステイリーはハワイの人口減少を憂い、かつその要因が自分たち「白人」のなかの一部にあることを述べている。このようにハワイアンにたいする温情的姿勢と自分たち白人の責任を問う姿勢は、娘ミルドレッドが述べるように「慈悲」「平等」の心をもって、世界中の人々と接するステイリーの一面とみることができる<sup>35</sup>。このようにステイリーは、ハワイアンの劣性を強調するアメリカ人宣教師とはまったく異なるレンズをとおしてハワイアンをみていたのだった。

ステイリーのこうしたハワイアンへの温情的態度はハワイアンの伝統的慣習の復活の奨励へと結びついた。1863年11月にカメハメハ四世が死去すると、ステイリーの指揮と助言のもと、英国国教会の豪華な儀式とハワイ古来の風習を組み合わせた形での葬儀が1ヶ月以上にわたっておこなわれた<sup>36</sup>。さらに、1866年、カメハメハ四世と五世の妹であるヴィクトリア・カママル・カアフマヌが死去したときにも同様の葬儀が執り行われた<sup>37</sup>。しかも、後に詳述するようにカママルの死去のさいには、彼女の死を悼むフラの催しがイオラニ宮殿で約1か月間にわたって執り行われた<sup>38</sup>。このような古代ハワイの慣習に則った弔いが復活したのは、アメリカ人宣教師が到来して以降はじめてのことであった。

ステイリーの個人的思想についていえば、それは19世紀後半のイギリス社会で自由主義的思想に重なる部分が多かったといえる。ステイリー一家が、中産階級に属していたこと、イギリス教育界において大きな功績をおさめていたことなどから、ステイリーは文化人に近いような人物であったようである。実際、彼が交流した人物はいずれも社会的に影響力を持った著名人たちであり、ステイリー自身、彼らとの交流のなかで自身の宣教思想を培ったと推察できる。たとえば、当時「種の起源」が世界的論争を巻き起こしていたチャールズ・ダーウィンとは個人的に親交を深めていた。ステイリーの娘で医師のミルドレッドが記述した伝記によれば、ステイリーはダーウィン以外に、哲学者ジョン・スチュワート・ミルや看護師のフローレンス・ナイチンゲールなどとも交流してい

たという<sup>39</sup>。信仰にかんしては、英国国教会内部に多様な信仰理念が存在するようになったこの時期において、それぞれの会派にたいする寛容な姿勢を見せていた。英国国教会内部では、聖職者というよりも教育者として功績が認められていた人物であった<sup>40</sup>。

以上からわかることは、ステイリーが「自由」「平等」「寛容」といった理想のもと「先住民文化保護主義」を貫いたということである。こうしたステイリーが国王の庇護を受けてハワイで布教活動をおこなうことにたいし、アメリカ人宣教師は敵意をむき出しにしたのである。

#### 4. アメリカ人にとってのステイリー

ステイリーがハワイに到着した頃、アメリカ人会衆派の宣教師はプランテーション経営に心を奪われ、ハワイに信仰を根付かせるといふ本来の使命を達成できていない状況にあった。さらに、1850年からモルモン教の伝道者がハワイに到来して以降、モルモン教伝道者が着実に信者を増やしていたことも、会衆派宣教師の焦燥感を掻き立てていた<sup>41</sup>。しかし、数々の懸案のなかでもっとも憂慮すべきは英国国教会のハワイ進出であった<sup>42</sup>。前述したとおり、前代のカメハメハ三世統治期において、アメリカ人宣教師によるハワイ支配の土台は完成しつつあった。しかし、ここにきてハワイ国王の庇護を受けた英国国教会の聖職者がハワイに到来したことは、アメリカ人宣教師にとってみれば自らの既得権益を脅かしかねない深刻な事態と映ったのである<sup>43</sup>。

ハワイにおける英国国教会の組織は、ハワイ政府によって「ハワイ改革カトリック教会」と名付けられた。これはハワイにおける英国国教会の立場をよく表しているといえる。それというのも、「カトリック」を名乗ることでプロテスタントのアメリカ人会衆派との差異を強調できたのみならず、「改革」という言葉が挿入されたことでローマ・カトリック教との差異も強調できたからである。これは、ステイリーの賛同を得て決定した名称であった。ステイリーはカトリックにたいしても寛容な姿勢を示していたため、この名称にさして違和感を抱かなかったようである。しかし、組織名に「カトリック」という文言が入ったことで、ローマ・カトリックを嫌悪するアメリカ人会衆派宣教師の感情は刺激されることになったのである<sup>44</sup>。

質素を信条とする会衆派宣教師は、とりわけ英国国教会特有の豪華な信仰様式を攻撃した。アメリカ人会衆派宣教師のルーファス・アンダーソンは、ステイリーの執り行う儀式の様子を次のように記述している。

特別な場合をのぞき、(英国国教会の)説教を聞く聴衆の数はどこであっても少ない。礼拝では、けばけばしい装飾が施され、その様子はローマ・カトリックによく似ている。(中略) 主教冠はイングランドの主教もめったに身に付けられないものらしいが、これをステイリーは国王と王妃の堅信式で身に付けていた<sup>45</sup>。(下線部は筆者による)

このように、アメリカ人会衆派の宣教師は、ステイリーが執り行う儀式にみられるカトリック的要素と英国国教会特有の「仰々しい儀式偏重主義」を批判した。一方、こうした英国国教会の豪華な



儀式はカメハメハ四世と五世が理想とする「強大な王権」を象徴するものとして王族に受け入れられたのだった。また、ステイリーの助言を受け、ハワイ政府はクリスマスを祝日とすることと聖金曜日の遵守を宣言したが、こうしたカトリックの習慣が定着しつつあることに、アメリカ人会衆派宣教師は声高に反発を示した<sup>46</sup>。

アメリカ人会衆派の英国国教会にたいする批判の矛先は、ハワイアンにたいする姿勢にもあらわれた。ハワイアンを立ち遅れた存在として措定し、その「野蛮性」や「怠惰性」は文明化によって克服されるべきと捉えていたアメリカ人会衆派にとって、ハワイアンの風習を尊重し、それを復活させようとするステイリーの行動は、自らの宣教思想に真っ向から対立するものであった。

到着早々から攻撃にさらされたステイリーのほうも、「もし世界の辺境にあるこの地で、近代的ピューリタニズムと伝統的宗派である英国国教会が敵対することがあれば、敵であるピューリタニズムの攻撃に我々が応じる用意があるということを相手に知らしめるべきだ」と述べ、アメリカ人会衆派宣教師にたいする敵対心をあらわにするようになった<sup>47</sup>。

ところで、ステイリーを批判したのは、会衆派アメリカ人宣教師のみではなかった。もっとも辛辣にステイリーを批判したのが、カメハメハ五世統治下の1866年にアメリカの新聞特派員としてハワイを訪れていたアメリカ人作家マーク・トゥエインであった。以下では、ステイリーによって復活をみた古代ハワイの風習にかんする描写と、アメリカ人宣教師による「文明化」の功績を台無しにしようとするステイリーへの批判についてのトゥエインの言説を追ってみたい。

トゥエインのハワイ滞在中、王族ヴィクトリア・カマルの死を弔う儀式が1か月以上にわたって毎晩夜通し宮殿の中庭で繰り広げられていた。トゥエインはこの間「壁の向こうで行われている異教徒の魔術をみてみたいという好奇心に駆られていた<sup>48</sup>」。外国人が宮殿のなかに入ることは、カメハメハ五世の命によって禁じられていたが、この催しの最終日には外国人が見物することが許可されたため、このときトゥエインはようやくフラを見物する機会を得たのだった。そのときの様子をトゥエインは次のように描写している。

太鼓のあとは、これまでその噂をよく耳にし、見物したくてしかたがなかった、かの有名なフラフラだった—それは、一世紀も前の古い異教時代から伝わる、男たちに燃えたぎる情熱を喚起させる性欲をそそる踊りであるはずだった。ところが30人ほどの胸の豊かな若いネイティブの女性たちが、(中略) いままで聞いたことのないような、この世のものとは思えぬ、さかりのついた猫の鳴き声のような声をあげはじめた。(中略)(合間に歌われる激しい詠唱の言葉は、露骨な言葉遣いで、ハワイの主要な新聞ではあいまいにほのめかされているように、はっきりと述べることのできないような、ある内容を示していた)—そのあと、踊り手がけいれんを起こしたかのように体をくねらせ、それが少しのあいだつづくと、突然終わりになって、猫の鳴き声のような大合唱が沸き起こった<sup>49</sup>。(下線部は筆者による)

期待していた「性欲をそそる」フラとはまったく異なるフラを目にしたトゥエインは「この世のも

のとは思えぬ、さかりのついた猫の鳴き声のような声」や「けいれんを起こしたかのように体をくねらせ」といった表現で、宗教性に満ちた「野蛮な」フラを見た衝撃をあらわしている。また、文中のかっこのなかに述べられた「はっきりと述べることのできないような、ある内容」とは生殖器を讃えるフラ・マイを指していると推察できる。こうしたフラを見物したトウェインは、「われわれは（ステイリー）主教のおかげで不気味で不愉快な光景をみることができた<sup>50</sup>」と得意の皮肉を交えながら、不快感を生じさせた責任をステイリーへと転嫁する。

現地人がむかしからの風習に、だらだらと未練を感じるのが悪いことだとは思わない。しかし、未開時代のこうした風習が、とっくの昔に捨てられ、忘れられようとしているというときに、ステイリー主教がそれを復活させたことにたいして文句のひとつもいいたいくなる—つまり、アメリカ人宣教師たちの教えを忠実にまもる世代がもう一世代つづいていたなら、こういった風習を永遠に葬りさり、過去の思い出にすることができたからなのだ<sup>51</sup>。

このようにトウェインはアメリカ人会衆派宣教師と同様の立場から、英国国教会主導下で実現したフラの復活を痛烈に批判している。さらにトウェインはステイリーがいくらハワイアン文化を尊重したとしても、ハワイにおけるアメリカ人勢力を前にしては英国国教会の努力は無に帰すであろうことを次のように述べる。

主教は不屈の精神で闘いつづけているが、その基盤は脆弱だといえる。サンドイッチ諸島において富を産み出す力、すなわち農業、商業、貿易業はアメリカ人、つまりは共和主義者の手中にあるのだから。この国の宗教権力もまたアメリカ人、つまり共和主義者が掌握している。そのうえ、この国の人々にはみな民主主義的なピューリタニズムの精神が浸透し、彼らもまた共和主義者なのである。この国は骨の随まで「共和主義」なのである<sup>52</sup>。（下線は筆者による）

トウェインの目からみても、宣教師を中心とするアメリカ人勢力はこの時点ですでにハワイにおいて盤石な支配体制を構築していた。それゆえ、トウェインからすれば、アメリカの「共和主義」がハワイに浸透する状況にあっては、イギリスが介入する余地はなかったのである。そして、トウェインが「共和主義」を主張するのは、立憲君主制国家イギリスにたいする自国アメリカの優位性を強調するためであった。このようにトウェインは、実際目の当たりにした古代ハワイの儀式に異教性と野蛮性をみだし、それらを目にしたことから生じた不快感のはけ口を英国国教会にもとめた。それのみならず彼はさらに議論を推しすすめ、先住民文化保護主義を掲げハワイ国王との紐帯をはかるステイリーの試みを嘲笑し、ハワイにおけるアメリカの勝利を高らかに謳っているのである。

こうしたアメリカ人による辛辣な攻撃にさらされていたステイリーは、自らへの批判にたいする意見を取りまとめた *Pastoral Address* を1865年に出版して配布したが、このなかで自身の立場を以下のように説明している。

我々は政治的動揺のようなものを持ちこむためにこの地にやってきたのではない。我々は、政治的なデマゴグとしてこの地にやってきたのでもない。そうではなく、キリストとその教会のために働く者として、まだ伝道の余地のある（この言い方が宣教師たちに信じてもらえるのであれば）この地にやってきた。そして、我々の目的は、この地の民の偉大な父である国王を助けることである。それは、この地の民の道徳的水準を高め、さらに、現実問題として民族の消滅という事態から彼らを救い出すことである。私を誤解しないでほしい<sup>53</sup>。（下線部は筆者による）

ここにみるように、ステイリーは政治的意図をもってハワイにやってきたのではなく、その目的は国王を助け、ハワイアンを活性化を取り戻そうとすることにあった。そのような彼が、ハワイに足を踏み入れたとたん、アメリカ人の宿敵とみなされたのは、アメリカ人にとってイギリスの存在がつねに脅威であったからである。さらに、英国国教会が国王の庇護を受けてハワイに教会を設立し、アメリカ人宣教師によるネイティブの「文明化」を否定する態度をとり続けたことは、アメリカ人宣教師の敵意を先鋭化させるばかりであった。

ステイリーは1870年にイギリスに帰国した。その2年後の1872年にはアルフレッド・ウィリス主教がホノルルにやってきて、ステイリーの職を引き継いだ。ハワイにおける英国国教会の組織名も、このとき「改革カトリック教会（Reformed Catholic Church）」から「アングリカン・チャーチ・イン・ハワイ（Anglican Church in Hawaii）」に変更された<sup>54</sup>。1893年にハワイ王国が転覆すると、主教職にはアメリカ人が就くようになった。この組織は、現在も「英国国教会ハワイ教区（Episcopal Diocese of Hawaii）」として存続している。

ハワイにおいて英国国教会の主教が辛辣に非難されたのは、ステイリーが最初で最後の人物であった。1870年代のカラカウア王の時代に入ると、アメリカは互恵条約の締結によって真珠湾の独占的使用権を獲得し、さらに在地アメリカ人が起草した「1887年憲法」を銃による威嚇のもと制定させることで、強圧的にハワイをアメリカの手中におさめていった。こうしたなかで、イギリスの存在はもはや蚊帳の外に置かれ、1893年、アメリカ連邦軍の支援を受けた在地アメリカ人によるクーデターによってハワイ王国は転覆を余儀なくされた。

1860年代のハワイ王国は、アメリカ人が築いた盤石な支配体制に動揺がもたらされた時期であった。この時期、カメハメハ四世、五世が、アメリカによる併合を回避するためにイギリスに接近するなかで国王の庇護を受けてハワイに進出したステイリーは、アメリカ人にとって格好の攻撃対象となったのである。しかしながら、ステイリーは「アメリカ人会衆派との戦いに応じる」<sup>55</sup>と述べたこともあったが、彼の目的はハワイアンを活性化することによってハワイ国王を支えることにあった。しかもこうしたステイリーの信念に基づいた行動は、あくまでもハワイ国王のもとに忠じたものにすぎず、イギリス政府がステイリーのハワイ派遣を足がかりにハワイ獲得を企図したという事実は存在しない。一方のアメリカ人会衆派宣教師は、ハワイへの入植を開始した1820年以降、半世紀近くの時間を費やして宗教・文化・経済・政治の諸側面でハワイをアメリカ化する基盤を形成

していった。また、アメリカ本土においても1850年代からハワイ併合問題が連邦議会で審議されるようになり<sup>56</sup>、領土としてハワイを組み入れる構想がこの時期すでに描かれつつあった。こうしたハワイにたいする英米両国の事情の相違からみても、1860年代の英国国教会とアメリカ人会衆派とを二項対立的にとらえることはできないはずである。

## おわりに

ステイリー自身が弁解していたとおり、彼は政治的意図をもってハワイにやってきたのではなかった。英国国教会が、海外伝道の手腕に長けた主教の職位にある者のなかからハワイへの派遣者を決定したのではなく、教育面における功績から牧師のステイリーを抜擢したことからみても、イギリス側がステイリーを派遣した目的が政治性を帯びていたとは考え難い。また、イギリス政府も、カメハメハ四世の聖戦者派遣要請を許諾し、聖戦者のハワイ派遣を快諾したものの、これを機にハワイを奪回しようとした事実は存在しない。当時のイギリスは、インドをはじめとした世界に植民地を有する帝国として君臨していた。こうしたなかでイギリスは、アメリカが半世紀の時間をかけて支配体制を築いていたハワイに介入しても、もはや勝ち目のないことを認識していた可能性が高い。それにもかかわらず、ステイリーを「イギリスの手先」として徹底的に攻撃したのはアメリカ人であった。とりわけ、マーク・トウェインがハワイから本国に送信する新聞記事は当時西部を中心に話題となっていたことから、ステイリーにたいする容赦ない酷評は、瞬く間に全米に知られたはずである。

アメリカは歴史をつうじて「敵」を創造してきた、とよく言われる。つまり、アメリカはつねに「敵」をつくることで、自国のおこないを正当化してきたのである。その手法が1860年代のハワイにおいても採用されたのではないだろうか。つまりステイリーは、アメリカによってつくられた「敵」だったと捉えることができる。「敵」をつくる深層心理には、自分の優位性を誇示したいという欲求、理想どおりにならないのではないかという不安感や恐怖などが潜在する。19世紀後半に入ると、アメリカ人にとってのハワイは、他国の干渉を許さない未来の領土として描かれ、西漸運動の延長線上に位置するフロンティアとなった。こうしたなかで、アメリカはステイリーという「敵」をつくり、アメリカ人によるハワイの「文明化」の功績と自国の優位性を再認識することで、ナショナルアイデンティティを確立していった。こうして確立されたハワイに対するアメリカ人の優位的地位は、やがてはハワイ併合への道筋を決定づけることになるのである。

## 註

- 1 たとえば、1970年代以降興隆したハワイアンによる権利回復運動の指導者で歴史研究者でもある人々による以下の研究が代表的なものとして挙げられる。Haunani-Kay Trask, *From a Native Daughter: Colonialism and Sovereignty in Hawai'i* (Honolulu: University of Hawai'i Press, 1999) ; Noenoe K. Silva, *Aloha Betrayed: Native Hawaiian Resistance to American Colonialism* (Durham: Duke University Press, 2004).
- 2 君塚直隆、細谷雄一、永野隆行編『イギリスとアメリカー世界秩序を築いた四百年』勁草書房、2016年、68-74頁。

- 3 *The Pacific Commercial Advertiser*, December 30, 1865.
- 4 A. Grove Day, ed. *Mark Twain's Letters from Hawaii* (Honolulu: University of Hawai'i Press, 1975), 170. 以下 *Mark Twain's Letters* と表記。
- 5 Robert Louis Semes, "Hawaii's Holy War: English Bishop Staley, American Congregationalists, and the Hawaiian Monarchs, 1860-1870," *The Hawaiian Journal of History* 34 (2000): 113-38.
- 6 山本貴裕「ハワイ王国における可視的教会と不可視的教会の衝突—二つの教会論とその文化的含意」『中・四国アメリカ研究』第6号 (2013)、1-22頁。
- 7 山本、16頁。
- 8 たとえば、以下の研究が挙げられる。大谷裕文、塩田光喜編著『海のキリスト教—太平洋島嶼諸国における宗教と政治・社会変容』明石書店、2016; Rowan Strong, "The Colonial Religion of the Anglican Clergy: Western Australia 1830 to 1870," *Journal of Religious History* 38-1 (2014), 91-114. また、イングランド中心主義から脱却した「新しいブリテン史」を提唱するニュージーランド人研究者ポーコックは、南アフリカ、オーストラリア、ニュージーランドなどのイギリスの支配が及んだ地域が「ブリテン史」の構成地域に含まれることを強調している。J.G.A. Pocock, *The Discovery of Islands: Essays in British History* (Cambridge University Press, 2005). [J.G.A. ポーコック『島々の発見』犬塚元監訳、2013年、名古屋大学出版会]
- 9 William R. Hutchinson, *Errand to the World: American Protestant Thought and Foreign Missions* (Chicago and London: The University of Chicago Press, 1993), 45.
- 10 宣教師到来後のハワイアンによるキリスト教受容については以下の研究を参照。Jennifer Fish Kashay, "From 'Kapus' to Christianity: The Disestablishment of the Hawaiian Religion and Chiefly Appropriation of Calvinist Christianity," *Western Historical Quarterly* 39, no.1 (2008): 17-39.
- 11 George Vancouver, *A Voyage of Discovery to the North Pacific Ocean, and Round the World 1790-1795*, vol.5 (London: John Stockdale, 1801), 47-48.
- 12 Ralph S. Kuykendall, *Hawaiian Kingdom*, vol.1 (Honolulu: University of Hawaii Press, 1953), 42, 54. これにたいし、当時のイギリス政府はハワイ王国との友好関係を維持するという姿勢をハワイ政府にたいし示していた。
- 13 Kuykendall, vol.1, 76-79.
- 14 Gavan Daws, *Honolulu the First Century: The Story of the Town to 1876* (Honolulu: Mutual Publishing, 2006), 112-19. 問題の発端は、ハワイに駐在していたイギリス領事リチャード・チャールトンとハワイ政府との間に生じた土地をめぐるトラブルだった。チャールトンは、1840年にホノルル中心部にある土地をめぐるハワイ政府にたいして訴訟を起こしていた。その訴因は、チャールトンが主張する土地の所有権をハワイ政府が承認しなかったことにあった。この争いに介入したポーレットはハワイ政府にたいし、チャールトンへの土地の引き渡しと賠償金の支払いをもとめ、これらの要求にハワイ政府が応じない場合にはホノルルを攻撃すると威嚇した。さらに、ポーレットはハワイ王国の内政にも干渉しはじめたことから、カメハメハ三世はイギリス側の圧力に屈するかたちでハワイ王国を暫定的にイギリスに譲渡することに同意し、2月25日、ハワイ王国はイギリスの暫定政府の保護下に置かれた。
- 15 Kuykendall, vol.1, 220.
- 16 Linda S. Parker, *Native American Estate: The Struggle over Indian and Hawaiian Lands* (Honolulu: University of Hawaii Press, 1989), 103.
- 17 英国国教会は、英語では *Anglican Church* と呼ばれ、日本語でもイングランド国教会、イギリス国教会、アングリカニズムなどの名称があてられているが、本論では「英国国教会」と表記することとする。
- 18 この時リホリホ(後のカメハメハ四世)は兄のロト(後のカメハメハ五世)とともにアメリカ人官僚ジェリッド・ジャッドに率いられ、アメリカやヨーロッパを巡訪した。このとき、アメリカを訪れた二人の王子が白

人から受けた人種差別の経験が、彼らのアメリカにたいする嫌悪感を引き起こすことになった。たとえば、1850年6月4日、ワシントンD.C.からボルティモアに向かう列車に乗ったりホリホとロトは、車掌に列車から降りよう命じられ、ハドソン川の船舶内では、ダイニングサロンへの入室を拒否された。彼らの肌の色が浅黒いことから受けたこのような差別的な対応は、反米感情を醸成したとみられる。アメリカ人宣教師がハワイ王族にたいして主張していたのは、アメリカが自由と民主主義を体現する理想的な国家であるということであった。しかし、四世と五世が実際にアメリカ本土で経験したアメリカは、肌の色によって人種の優劣を決定する社会であったのである。また、アメリカを周遊した二人はその後イギリスも訪れたが、ここでの印象はアメリカのそれと全く異なるものだった。Gerrit P. Judd IV, *Dr. Judd: Hawaii's Friend* (Honolulu: University of Hawaii Press, 1960), 164-91.

- 19 Ralph S. Kuykendall, *The Hawaiian Kingdom*, vol.2 (Honolulu: University of Hawaii Press, 1953), 83.
- 20 Daws, 157. 四世がネイルソンを銃撃したのは、妻エマと関係を持っているとの噂を聞き、逆上したためであった。
- 21 Daws, 158.
- 22 Kuykendall, vol. 2, 85.
- 23 Semes, 115.
- 24 ステイリーは、ロンドンの聖マーク・カレッジ (St. Mark's College) で長年数学の教員を務め、また、サリ州ワンズワースの大学校の校長も務めていた。ステイリーのこうした教育分野での実績は、後に彼がハワイで学校を設立することへとつながった。イギリス側がステイリーの派遣を決めたのは、ハワイにおけるイギリス型教育の普及をはかる目的があったためとみられる。Semes, 116.
- 25 Mildred E. Staley, *A Tapestry of Memories: An Autobiography* (Hilo, Hawaii, The Hilo Tribune Herald, 1944), 16. ステイリーの娘ミルドレッドは医師としてイギリス植民地で医療活動をおこなっていた人物であり、その自伝では、父ステイリーがハワイを訪れる以前、教育者としてイギリスで活躍していた様子を記述している。それによれば、ステイリーはイギリス国内で貧困層も含めた児童にたいする教育の義務化を訴えており、その成果として、イングランドとウェールズでの義務教育を定めた法律が制定された。
- 26 Kuykendall, vol. 2, 94.
- 27 Kuykendall, vol. 2, 95-96.
- 28 *The Pacific Commercial Advertiser*, December 30, 1865.
- 29 Thomas Nettleship Staley, *Five Years' Church Work in the Kingdom of Hawaii* (London, Oxford and Cambridge: Rivingstons, 1868), 13.
- 30 Staley, *Five Years' Church Work*, 14.
- 31 アンドリュー・ポーター「帝国と世界」『オックスフォード ブリテン諸島の歴史 第9巻 19世紀 1815年~1901年』コリン・マシュー編、君塚直隆監訳、慶應義塾大学出版会、2009年、204-205頁。
- 32 Staley, *Five Years' Church Work*, 14.
- 33 Staley, *Pastoral Address by the Bishop of Honolulu* (Honolulu, Hawaiian Gazette, 1865), 13.
- 34 Staley, *Five Years' Church Work*, 9.
- 35 Mildred E. Staley, 10, 18.
- 36 Staley, *Five Years' Church Work*, 30-50.
- 37 Noenoe K. Silva, "He Kānāwai E Ho'opau I Na Hula Kuolo Hawai'i: The Political Economy of Banning the Hula," *The Hawaiian Journal of History* 34 (2000):43; Norris W. Potter, Lawrence M. Kasdon, and Ann Rayson, *History of the Hawaiian Kingdom* (Honolulu: Bess Press, 2003), 120.
- 38 Silva, 43.
- 39 Mildred E. Staley, 10.

- 40 Semes, 117-118.
- 41 *The Instructor*, August, 1964, 26-27頁。モルモン教のハワイでの伝道活動は1850年に開始されたが、その四年後にはハワイに居住する約4,000人がモルモン教に改宗した。
- 42 Putney, 68.
- 43 アメリカンボード本部で指導的立場にあったルーファス・アンダーソン・ライマンは1863年にハワイを視察したさい、アメリカンボードのハワイにおける組織で HEA (Hawaiian Evangelical Association, ハワイ福音主義協会) の牧師の大半がアメリカ人によって占められている現状を目の当たりにし、一刻も早くハワイアンの牧師を養成するよう HEA にもとめた。教会組織が宣教師から現地人の手に確実に継承されていないという事態は、ハワイでの布教がまだまだ十分な成果を収めていないことを意味したからである。ライマンによって HEA の代表に任命された宣教師ルーサー・グリック (Luther Gulick) は代表就任にあたって、「ネイティブの牧師を養成するよう全力をあげなければならない。さもないと、ハワイは英国国教会の手に渡ってしまう」と危機感を露わにした。Putney, 68.
- 44 Semes, 121.
- 45 Rufus Anderson, *Hawaiian Islands: Their Progress and Condition under Missionary Labors* (Boston: Gould and Lincoln, 1864), 352-53.
- 46 Semes, 126.
- 47 Staley, *Pastoral Address*, 31.
- 48 *Mark Twain's Letter*, 161.
- 49 *Mark Twain's Letter*, 168.
- 50 *Mark Twain's Letter*, 170.
- 51 *Mark Twain's Letter*, 169.
- 52 *Mark Twain's Letter*, 172-73.
- 53 Staley, *Pastoral Address*, 9.
- 54 Episcopal Church in the Hawaiian Islands, *Centennial Celebration of the Episcopal Church 1862-1962*. これはイギリスのランベス宮殿図書館が所蔵する英国国教会が出版したパンフレットであり、出版地、出版年等の情報が記載されていない。
- 55 Staley, *Pastoral Address*, 31.
- 56 Kuykendall, vol.1, 409.

